

## 第12回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和4年9月21日(水)

○会場 清水町役場4階 第1会議室

○出席者(委員)

- ・岩崎 清悟 座長 (静岡ガス株式会社 特別顧問)
- ・中山 勝 副座長 (一般財団法人企業経営研究所 理事長)
- ・鈴木 誠一 委員 (株式会社エステック 代表取締役)
- ・川村結里子 委員 (株式会社結屋 代表取締役)
- ・長倉 一正 委員 (有限会社長倉書店 代表取締役)
- ・三船美也子 委員 (一般社団法人日本親子体操協会 理事)

○欠席者(委員)

- ・植田 勝智 委員 (ファルマバレーセンター センター長)
- ・矢嶋 敏朗 委員 (日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 准教授)

まちづくりビジョンについて検討を行った。

### 1 清水町の交通体系について

#### (1) バス路線について

- ・ 家の外へ出ること社会性が維持され、健康な暮らしができると言われて  
いるが、清水町は電車が通っておらず、高齢になると自動車の運転も難しく  
なるため、交通体系の充実が必要だと考える。
- ・ 足があればどこへでも行くと考えている高齢者は多い。循環バスの停留所  
を増やすとよいのではないか。
- ・ 現在のバス路線は内回りと外回りの2方向のみだが、自動車がなくても外  
へ出ることができる「歩いて暮らせるまち」を目指すため、サントムーン柿  
田川を中心に東西南北を回ることができるような4方向のコースを作り、さ  
らに運賃を無料にすることができれば、使いやすさが向上し利用者も増える  
のではないか。
- ・ 清水町は土地が平坦であり、町域も菱形に近いので、4方向のコース設定  
には適している町だと思う。バス路線については、公共がどこまで支えるの  
かという議論もあるが、路線の整備により恩恵を受けるところから協賛金を  
いただくという方法も考えられる。
- ・ バスの現在位置やバス停までの所要時間は、アプリで確認することを東海  
バスで実施している。雨中や酷暑の中をバス停で待つ不便さを解消してくれ

る。浜松市で実施しているタクシーのデマンド型は、清水町ではあまり需要がないのではないか。

- ・ 4方向のコースだけでなく、利用者が多い区間があれば直行便があってもよいのではないか。例えば病院の受付時間内に早く着くことができるものがあれば、利用者が増えると思う。また、民間企業と連携し、企業が社員を送迎しているバスを利用できる仕組みを考えてはどうか。
- ・ 新しい道路にバス停を作るのであれば、雨をしのぐことができ、アプリを見ることができなくても到着時間がわかるような優しいバス停にしてほしい。
- ・ 設備の費用やセキュリティ面で課題はあるが、マイナンバーカードを活用してはどうか。バスの料金を現金ではなくタッチで支払っている高齢者も多いため、カードを使うことは苦にはならないと思う。社会実験ということで実施すれば、国から補助金も出るだろう。

## (2) 歩きやすいまちづくりについて

- ・ 街灯を設置するなど、夜間でも歩くことができるように歩道を整備することが必要ではないか。県道であれば県との管轄の問題があるとしても、住みやすいまちを目指すのであれば、町の施策として進めていくべきだろう。
- ・ 街灯の設置が難しいのであれば、人感センサーを使って歩道を光らせたり、道路沿いの住民に点灯の協力を呼び掛けたりと、身近にできることもあると思う。
- ・ 国土交通省では、まち歩きの取組を推進しており補助金もある。2車線のうち1車線を歩道にするというような取組もあり、そのように思い切った整備も必要だと思う。
- ・ 2車線を1車線にするという考え方は、一方通行を利用すればできるかもしれないが、現状の狭い道路では大々的に実施することは難しい。一部のみ実施してみるという方法はあるかもしれない。
- ・ 日本は自動車が走りやすいような道路を整備してきたが、ヨーロッパでは道路を整備する際に必ず歩道と自動車道を作る。清水町においても、道路整備の発想を変え、歩く人や自転車を通る人のことを考えていかないと、これからの時代にはそぐわない。整備された歩道を大きなウォーキングコースとして繋ぐような構想を持ってほしい。

## (3) まち歩きアプリについて

- ・ データがないと良い施策にはならない。データがあれば、その施策に実効性があるか検証できる。
- ・ アプリは、サービス開始直後は利用者数が伸びると思うが、徐々に利用されなくなっていく。継続してモチベーションを維持できるような仕組みが必要であり、そのための働きかけをどこかの部署が責任を持って行わないとい

けない。関連するイベントや施策を続けていくことが大事だと思う。

- ・ 清水町には観光の要素があまりないため、健康に焦点を当て、健康寿命を延伸するというターゲットを作り、健康に関するアドバイスなどが個人にフィードバックされていく環境ができるとよい。歩くことによる健康寿命への効果は非常に大きい。アプリのようなソフト面だけでなく、ウォーキングコースの整備などのハード面も併せて進めてほしい。
- ・ まちを歩く中で挨拶を交わすことで、人との繋がりが生まれる。アプリにおいては、飴と鞭のように楽しむ部分とやらなければいけないと思う部分があることで、継続的に取り組むことができるのではないかと。

#### (4) 新しい交通の在り方について

- ・ 交通法規や規制緩和の問題はあると思うが、電動キックボードは上手く活用できれば便利だと思う。アメリカではどこでも乗り捨てることができ、子どもも利用するなど乗りやすいシステムが確立されているが、目的地以外の場所に返却しなければならないと不便である。管理者が管理しやすいシステムは、利用者からすれば利用しにくいシステムになってしまうため、利用者の立場に立ったシステムを考えた方がよい。高齢者や子どもなどの交通弱者が気軽に利用できる乗り物があるとよいと思う。
- ・ 観光業と連携し、サブスクリプション（※1）型シェアタクシーの実証実験を行っているところがあると聞いた。公共交通はこれから減っていくと思われるため、それを何で補うかを考えたときに、例えば医療機関と連携するなど、町の特色や求められている用途と新しいモビリティを組み合わせることができると面白いのではないかと。
- ・ バスであればステーションまで行かなければならないという手間がある中で、それを補完する役割として小回りが利くタクシーが活用できるとよいのではないかと。高齢化社会になると、バスへの乗車が難しい人もいるため、タクシーの需要はあると思う。
- ・ 来院者の自動車が敷地内の駐車場に収まらず、近くの広大な土地を駐車場として使用している病院があるが、もったいない土地の使い方であり、経済学的に言えば大きな無駄だと思っている。病院としても、タクシーのシェアなどにより土地にかかるコストを抑えることができるとよいのではないかと。そのような病院とタイアップしながら、町も取り組んでみてはどうか。

## 2 くらしやすさを高めるための取組について

### (1) 人との交流・社会との関わりを持つ場について

- ・ 日常生活における充実度、満足度の向上は、ウェルビーイング（※2）を高めることと繋がっていると思う。ウェルビーイングは、人との交流や社会

との関わりの中で高まると聞いた。町がそのような場を作り、関わっていくことができるかよいのではないか。

- 85歳以上になると、人間は自分の我が抜けて利他の気持ちが湧き、社会と接点を持つことで幸福度が高まるという話を聞いた。社会との関わりを増やすためにどうしたらよいか考えるとよいと思う。
- 日常生活の行動範囲が狭くなり人との交流が減ると、ますます健康が失われる。そもそも交流とは何かと考えると、趣味を同じくする人が集まる、あるいは社会問題について議論をすることなどではないか。最近では、自分の意見を対面ではなくインターネット上で発信し、反応を待つような交流が行われているが、これは本当の意味での交流ではないと思う。町に交流の場があるとよい。
- 高齢者にとっての交流の場は、病院ではないか。
- 豊橋市では、渦を巻くようにまちを活性化させるという“うずるまち”をコンセプトに駅前再開発を行っており、その取組の一つとして、地元の高校生が図書館を交流の場に行っている。
- 国土交通省のホームページを見ると、誰でも自由に利用できる手作りのベンチが公園に設置してあり、それが交流の場になっているという例もあった。柿田川公園は観光地として設計されているのかもしれないが、木製のベンチを設置して休憩できるようにした方がよい。そこから交流が生まれるかもしれない。そのような仕掛けが様々なところでできるのではないか。
- 柿田川公園の使われていない部分にキッチンカーを入れてはどうか。ベンチに腰掛けて食事をしながら、交流を深めることができる。そのような場づくりを町が主導で進めていくとよいまちになると思う。
- 清水町を移住の受け皿として考えるとき、子どもを通じたネットワークがないことが問題となる。地域での交流を通じて新しいネットワークが生まれるような環境をつくるのが大事だと思う。地元で生まれ育った人だけがよい町だと感じるようでは不十分である。自治体の施策によりどのようなネットワークが生まれているのか調べてみると、そこから新しい施策が生まれるかもしれない。積極的に民間も巻き込みながら、交流の場を継続・拡大していくことが重要ではないか。

## (2) 体験を共有する場について

- 映画を観る、美術館に行く、読書するだけでは文化を体験したことにならず、文化的な生活とは、その体験を誰かと話し合うことである。自分一人で楽しむだけでなく、どのように感じたのかを誰かと話すことがコミュニティ形成のきっかけになる。
- 清水町は買い物、学校、仕事などの面で見ても、平日の暮らしは並以上の

水準だと感じる。あとは、休日をどのように過ごすかが満足度に繋がると思う。

- 休日の過ごし方を充実させる方法として、例えば町が東京で開催している美術展の情報を発信し、それを見に行くという体験でもよいと思う。地方ではできない美術展もある。清水町は関東圏に近く、そのような都市部の文化も楽しみやすい町である。
- オーケストラ演奏の後に感想を話し合うなど、体験を単発で終わらせてしまうのではなく、その体験をテーマに話を繋げていくことが文化の在り方ではないかと感じる。例えばウォーキングの合間にベンチに腰掛け、同じくウォーキングをしている人と話ができるような仕掛けを設けることで、趣味や社会問題の話が深まるかもしれない。都会では難しいが、景色がよい清水町ならではの施策ができるのではないかと感じる。
- サークル活動においても、例えば体操教室の後にランチに行くような体験を共有する場があるものは、活動が長く続き地域の中でニーズが高まっていく傾向がある。一方で、そのような場があることにストレスを感じる人もいるため、日常生活の中に無理なく取り入れることができるとよい。
- 新型コロナウイルス感染症の影響により、体験を共有できるような場が失われてしまったケースもあるが、そのような場を続けていくことができるような対策が必要だと考える。
- 以前参加した宿泊研修において、研修の目的である勉強以外に参加者同士で交流を深める時間があり、自分が成長するきっかけを得ることができた。人と会ってコミュニケーションを取る場は必要であると思う。
- 失敗したとしても色々な取組に挑戦し、うまくいったものを施策として実行していくとよいのではないかと感じる。

### (3) 町の取組に関する情報発信について

- フィットネスクラブやスポーツクラブなど継続して通うような場所は、交流の場になっている。これらの施設とは違い、町の事業は期間が決まっており、1つの施設で毎日何かを実施しているということはない。毎日でも頻繁に何かが行われている場所があると、多くの人が居場所を見つけることができるのではないかと感じる。
- 三島市では、色々な場所で実施するイベントをまとめて確認できる告知を作っている。そのような情報が整理・網羅されたものがあると、住民が参加するきっかけになるのではないかと感じる。
- LINE で入手したい情報を選ぶとプッシュで通知されたり、イベント情報をまとめたポータルサイトを作ったりするなど、それぞれが取得しやすい方法で情報を得ることができるツールがあるとよい。

- 町のイベント情報を一覧性があるものにして示すことは、非常に効果がある。このような取組により住民に情報が提供され、それが広まっていくと、清水町は住民のために取り組んでくれる町というイメージができていく。

※1 サブスクリプション…製品やサービスを一定期間ごとに一定の金額（利用料）で提供するビジネスモデルのこと。

※2 ウェルビーイング…幸福。健康。世界保健機関（WHO）憲章の前文では、肉体的、精神的、社会的すべてにおいて満たされた状態を表すとされている。